

都心で何と限界集落再生についてのフォーラムが開かれ、全国

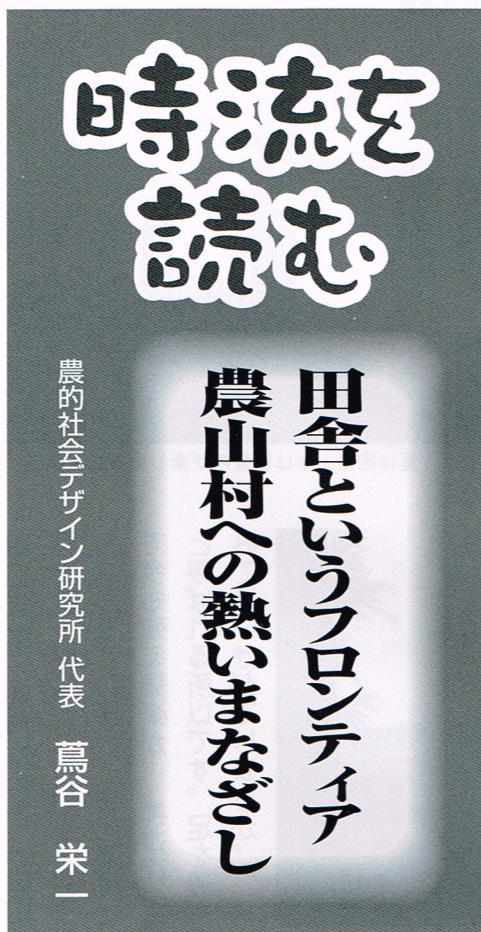
各地からとはいって、東京を中心とした首都圏からの参加者が多くを占める中、会場は満杯となつた。もはや限界集落問題は農山村だけの問題ではなく、全国、都市の問題としても認識されつつある流れを感じさせられるものであつた。

この11月中旬、東京の秋葉原で「限界集落イキイキ宣言! キックオフフォーラム」なる催しが開かれた。200名ほどが収容可能な会場は満員で、熱気あふれるフォーラムとなつた。しかも終わつてから、おそらくは参加者の半分以上が参加したであろう懇親会となつたのには驚かされた。それこそ肩と肩が触れ合うほどに席を詰めて座り、立錐の余地なし。そこで参加者は11時近くまでビールやワイン等を酌み交わしながら熱く交流。散会してからもしばらくは熱気が冷めやらなかつた。

齢化が進行し、コミュニティの維持など、地域活動が困難な状況に直面」しており、「限界集落」とも揶揄されているが、これを「水源の里」と呼び、「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」という理念を掲げて、流域連携を通じて「水源の里の集落再生と振興に向けた積極的な事業の展開」をめざしている。本格的な活動はこれからということであろうが、「水源の里」というネーミングに大いに共感するとともに、流域連携による活性化を目指す方向にはもう

このフォーラムは全国水源の里連絡協議会が開催したもので、2007年に設立され、現在179の市町村が参画しているという。農山村の多くは「過疎・高齢化が進んで、子供を産みたいとする人も多い。都市から農村への人口還流をすすめていくことが全体での出生率を引き上げることにつながつてくる」という。

もう一つは、京都府綾部市の場合であるが、中学生の半分以上はいったん都会に出て、いずれはUターンして綾部に戻つてきたいとしている。このネックになつているのが親で、「都會へでて偉くなれ」「金持ちになれ」と、高度経済成長時代の価値観にとらわれている人が多い、という。



都市住民に間口を広げて

都市住民の田舎を見るまなざしは確実に変化しつつある。田舎になかなかなじまない人も少なくはないが、田舎の側ももつと誇りをもつて、都市住民の還流に間口を広げていくことが必要であろう。

ここでフォーラムで出された話の中から二つだけ紹介しておきた。一つは、農村部の出生率は都市住民も交えて切り拓いていく時代が到来しているように思う。

事実である。都市部では家賃が高く保育園も少ない。仕事さえあれ

手を挙げて賛成である。

高い農村の出生率

ここでフォーラムで出された話の中から二つだけ紹介しておきた。一つは、農村部の出生率は都